第二の利点は、 対話を通じ異なる視点からの見方を知ることができるところです。 ものごとを一面的にだけ解釈していては、見えてこないことがあります。 それは時にゆがんだ解釈を招きます。 たとえば、ローレンス大学の国際政治学の授業で、「日本が国力を高めるとしたら、 どうしたらいいか」ということがトピックになったときのことです。 私は、 援助よる国際社会への貢献や経済発展によるソフト・パワーの強化が求められる、 と述べました。 ところが、 ある学生は次のように指摘しました。「国際政治では軍事力が国力を決めるため、 憲法を改正し核保有国になるしかない」と。 私の考え方が正しくて、 彼の考え方が間違っているとはいえませんし、 私の視点が間違っていて彼が正しいとは必ずしも言えません。 ここで大事なことは、 私が自分の考えを述べずにいたら、 彼のリアリスティックな批判を受けることなく、 軍事力の重要性を軽視したままでいたかもしれないということです。 このように、 対話を通じ異なる視点からの批判にさらすことで、 自分の考えをより深いものにできるのです。

3、授業を作り上げるのは誰？

対話という言葉で私が意味するのは、 授業を作り上げる責任を学生と教授の双方が負ったうえでなされる議論です。 日本で受けてきた授業とローレンスでの授業を比べたとき、 最も異なるのがこの点です。 日本では一般的に、 授業を行う責任は教授にあると考えられています。 そのため授業は、 教授がしてくれるのを学生が聞く、 という形になります。 講義では教授が一方的に話し、 学生がそれについての疑問や考えを投げかけることはほとんどありません。ここに対話は見出されません。

それに比べローレンスの授業は、 教授と学生または学生間でなされる対話によって成り立っています。 教授は授業の目的を達成するため、 さまざまな疑問を学生に投げかけ、 また学生の質問に答える責任を負っています。 一方の学生も、 同じ目的を果たすために、 質問であれコメントであれ、 教授やクラスメートの言葉に応答する責任を負っています。 つまり、 教授と学生の双方が授業を作り上げる責任を負い、 それを果たすためのプロセスによって授業が成り立っていくのです。 この合宿のワークショップでも、 ローレンスの授業と同じような献身が求められました。 ディスカッションはいつも7人ほどの小グループで行われ、 その後全体でシェアするという形をとっていました。 ワークショップの責任は、 参加者全員が負い、 その間でなされる対話によって作り上げられるのです。

こうした対話は、 人間関係を築くことで促進されます。 この合宿を通じ、 このことを痛感しました。 というのも、 ただ場所とテーマと情報が与えられ、 さあディスカッションしなさいというものではなく、 参加者の人間関係の構築に力が入れられていたからです。 パスィーのトレーナーは、 自分のコンフォート・ゾーンの外に出なさいと繰り返します。 安全地帯の外に出て、新たな出会いへと向かうよう促すのです。 そのため、 新たな人間関係を築くことが、 この合宿のもうひとつのテーマであるかのようでした。 自己紹介のゲームを何度となく繰り返し、 まるで新入生歓迎イベントのようでもありました。 また、 ディスカッションでも、 個人的な経験を引き出すテーマが与えられ、 参加者がお互いをよく知ることができる工夫がなされていたように感じます。 こうして新しい人と会い、 自分をさらけ出し、 その人たちに自分を知ってもらい、 そしてその人たちを知るということを繰り返すなかで、 ディスカッションの際に自分の意見を言いやすくなっていることに気がつきました。 同じことが、 他の学生にも起こっているようでした。 ここで知り合ったすべての人と親友のような深い関係を築くことはないと思います。 しかし少なくとも、 ディスカッションするにあたって、 ためらいをそう感じずに意見を交換し、 批判することができる関係を、 多くの人との間に築くことができました。 それは間違いなくディスカッションを活発なものにしていました。

4、献身するのみ

このエッセイでは、 早稲田の授業スタイルと比べたとき、 ローレンスのそれがどのような特色を持っているかに着目しました。 対話によって作られる授業の重要性。 それを認識した私は、 これまで以上のモチベーションを持って授業に臨んでいます。 留学での最後の学期、 悔いの残らぬよう対話に献身します。

留学先の大学の授業での「対話」の経験と、それを通した宇野君の思いと考察が語られています。

早稲田大学のクラスで、私が「アメリカの大学教育のエッセンス」として話したことを、宇野君自身が体で感じ、その意義を自分のものにしているのを読んで、私自身うれしく思います。

宇野君の留学もあと少し。その後、インターンシップを経て帰国とのこと。大きく成長した彼に、この秋、早稲田で再会するのが楽しみです。